

シェイクスピア祭



蜷川幸雄演出『リチャード二世』ルーマニア、クライオーヴァ国際シェイクスピアフェスティバル公演(2016年)稽古より

日時： 2017年4月22日(土) 13:00～16:30
場所： 明治大学駿河台校舎リパティタワー
(東京都千代田区神田駿河台1-1)

最寄駅からのアクセス

- JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩約3分
- 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩約5分
- 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩約5分



アクセスマップ URL

一般公開(予約不要、入場無料)

13:00 ご挨拶

13:10 トーク「蜷川シェイクスピアをふりかえる」

講師 松岡和子氏(翻訳家・演劇評論家、東京医科歯科大学名誉教授)

聞き手 野田 学氏(明治大学教授)

15:00 講演「シェイクスピアの面白さ」とは何か

講師 高田康成氏(東京大学名誉教授、名古屋外国語大学現代国際学部教授)

主催 日本シェイクスピア協会・日本英文学会

協賛 明治大学文学部協賛 提携 明治大学学部間共通総合講座「シェイクスピアの現代的魅力」

お問い合わせ先: 日本シェイクスピア協会事務局 Tel & Fax: 03 3260 8109

ホームページ: <http://www.s-sj.org>

講師プロフィール



「蜷川シェイクスピアをふりかえる」

圧倒的規模と想像力で「日本のシェイクスピア」を次々に発信し続けた蜷川幸雄。もはや新たな NINAGAWA SHAKESPEARE を観ることができないという事実の大きさが、重く感じられてなりません。継承か、超克か。そもそもシェイクスピアを含めて、日本演劇を超克しようとしていた蜷川亡き後、この問いは、彼のシェイクスピア作品をふりかえるところから始められるべきでしょう。

蜷川没後一年をまさに迎えようとする今回のシェイクスピア祭では、彩の国シェイクスピアシリーズで、「座付き翻訳家」として蜷川幸雄と長年協同してきた松岡和子氏に、蜷川シェイクスピアの特色と、ご自身の経験をふりかえっていただきます。

松岡和子（まつおかかずこ）氏

1942年旧満州新京（長春）生まれ。翻訳家・演劇評論家。日本シェイクスピア協会会員、国際演劇評論家協会会員。第21期、22期 国語審議会委員。2008年度まで文化庁文化審議会委員。東京女子大学英米文学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。専攻は17世紀イギリス演劇。発足当初の現代演劇協会（附属劇団雲）芸芸部研究生、『罪と罰』（演出・福田恆存）『黄金の国』（演出・芥川比呂志）の公演には演出助手として参加。1982年東京医科歯科大学（教養部）助教授（1986～97年）。【著書】『ドラマ仕掛けの空間』（創樹社）、『すべての季節のシェイクスピア』（筑摩書房）、河合隼雄氏との対談集『快読シェイクスピア』（ちくま文庫）、『「も」で読む入門シェイクスピア』（ちくま文庫）、『深読みシェイクスピア』（新潮文庫）など。【訳書】『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』『クラウド9』など多数。現在、シェイクスピア戯曲の全訳に取り組んでおり、既刊は『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』『夏の夜の夢・間違いの喜劇』『十二夜』『リチャード三世』『テンペスト』『ウィンザーの陽気な女房たち』『ヴェネスの商人』『ペリクリーズ』『タイタス・アンドロニカス』『コリオレイナス』『オセロー』『お気に召すまま』『恋の骨折り損』から騒ぎ』『冬物語』『ヘンリー六世・全三部』『じゃじゃ馬馴らし』『アントニーとクレオパトラ』『シンペリン』『トロイラスとクレシダ』『ヘンリー四世・全二部』『ジュリアス・シーザー』『リチャード二世』『ヴェローナの二紳士』『尺には尺を』『アテネのタイモン』（以上33本）。【受賞歴】1995年第2回湯浅芳子賞受賞（海外戯曲翻訳部門）。

聞き手 野田学（のだまなぶ）氏

1963年東京生まれ。英文学・演劇評論家。国際演劇評論家協会日本センター会員。演劇誌『シアターアーツ』（国際演劇評論家協会日本センター）、演劇誌 *Critical Stages*（国際演劇評論家協会、年刊およびウェブ：<http://www.critical-stages.org/>）編集長。



「シェイクスピアの面白さ」とは何か

シェイクスピアは「一時期のものではなく全ての時代のためにある」と言ったのはベン・ジョンソンだが、そののちイギリス革命の動乱を挟んで王政復古期ともなると、『リア王』にしろ『コリオレイナス』にしろ『リチャード二世』にしろ、そのまま上演されることはなく、悪名高い「改作」として大流行となる。その間わずか半世紀余り、「全ての時代のために」など何処吹く風。この歴史的事態を重く受け止めるならば、20—21世紀の極東の島国に生息するわれわれが「面白い」と思っているシェイクスピアは、ひょっとするととんでもない代物かもしれない。少なくとも、16世紀末-17世紀初頭の英国で特定の意味の形を成したシェイクスピアとは、およそかけ離れたものである可能性は高いのではないだろうか。それでもなお「面白い」と言うのであれば、その「面白さ」とは何か。

高田康成（たかだやすなり）氏

1950年東京生まれ。表象古典文化論。【単著】『キケロ ヨーロッパの知的伝統』（岩波新書1999）、*Transcendental Descent: Essays in Literature and Philosophy* (University of Tokyo Centre of Philosophy, 2007)、『クリティカル・モーメント—批評の根源と臨界の認識』（名古屋大学出版会、2010）。【共著】*Platonism and the English Imagination* (Cambridge UP, 1994)、*The Body and the Soul in Medieval Literature* (Boydell & Brewer, 1999)、『ムーサよ語れ—古代ギリシア文学への招待』（三陸書房、2003）、*The Classics and National Cultures* (Oxford UP, 2010) など。【翻訳】P. グリマル『キケロ』（白水社、1994）、P. ドロンク『中世ヨーロッパの歌』（水声社、2004）、G. スタイナー『師弟のまじわり』（岩波書店、2011）、『エラスムス＝トマス・モア往復書簡』共訳（岩波文庫、2015）など。

シェイクスピア祭

日本シェイクスピア協会と日本英文学会は、シェイクスピアの生誕を祝うのが慣わしとなっている4月23日（聖ジョージの日）頃にシェイクスピア祭を主催し、講演やパネルディスカッションを行っています。シェイクスピア祭の行事は、シェイクスピア協会員でなくてもご参加いただけます。

